

秋山和夫の幼児教育論 (3) — 「子育ての知恵」に注目して—

小野 順子

福山平成大学 福祉健康学部
(こども学科)

E-mail : onojun@heisei-u.ac.jp

【要旨】

本稿は秋山研究の第3報である。第1報では「幼小連携」、第2報では秋山の業績全体を鳥瞰した。そして、秋山が生きた昭和期後半の幼児教育史に関して史的資料を基に検証することが課題として明確となった。このため、本稿では、膨大な数の中から一つの著作物「子供とおとなの出会いから4 子育ての知恵」を取り上げ、それを詳細に検証することにした。

その結果、昭和40年後半の秋山の幼児教育に関する考えは次の2点であることが分かった。

1点目は、幼児教育で問題とされているのは、家庭での早期教育過熱化現象であること、2点目は、家庭教育の問題の解明には、幼児の生活や親の教育的配慮に焦点を当てて考察する必要があることである。

秋山は、幼児教育論を展開する際に江戸時代の教育論にこだわっているが、その理由が本研究で明確となった。つまり、教育の妥当性の問題は科学によっては解明されないと考えている。したがって、経験的・直観的にこの問題を把握しようとした先人はいくつかの経験的な結論を持っており、そのことを考察の対象にすることで教育の妥当性を解明できるとしているのである。

KEY WORDS : 秋山和夫、家庭教育、幼児教育論

1. はじめに

本稿は秋山研究の第3報である。第1報では「幼小連携」すなわち「小学校との接続」に焦点を当てて論じた。第2報¹⁾では、保育施設の形態が多様化している現在の保育現場の問題を解決する具体策を明らかにすることを目的として研究の視点を一つに絞らず秋山の業績全体を鳥瞰することによって、秋山の研究の概要を把握した。その結果、秋山の幼児教育・保育に関する熱い思いを感じると同時に、没する直前にも精力的に執筆や講演に取り組む姿を知ることができた。そして、秋山が生きた昭和期後半の幼児教育史に関して史的資料を基に検証することが課題として明確となった。²⁾

以上の課題を解決するためには、秋山の残した資料を綿密に読み分析することが大切と考える。つまり、秋山の著作物、講演資料などを一つひとつ詳細に検討することである。そこで、本稿では膨大な数の中から一つの著作物を取り上げ、それを詳細に検証することとする。

今回の研究対象は「子供とおとなの出会いから4 子育ての知恵」である。(以下、「子育ての知恵」と略す)これを取り上げたのは、昭和49(1974)年に秋山の単著として最初に出版され、それまでの秋山の幼児教育に関する考えが集約されていると考えるからである。

本書が出版された1970年代の秋山の状況を簡単に述べることにする。

1970年の前半は「我が国における幼児教育方法論の展開1—幼稚園概念と恩物主義との結合において」(岡山大学教育学部研究集録 1968)「3歳児保育に関する基礎研究」(日本保育学会 1971)「幼稚園における学級の適正規模についての考察」(岡山大学教育学部研究集録 1973)「保育観の検討」(岡山大学教育学部研究集録 1975)などの研究発表が業績の中心となっている。その後、1970年代の後半になると、岡山大学教育学部附属幼稚園研究報告に論説を発表するようになる。これは、幼稚園園長となり頻繁に保育現場に通って自身の幼児教育観を確立しつつあったからである。この頃のことを「子どもの目の輝くとき」の「あとがき」に以下のように述べている。「昭和52年4月から、岡山大学教育学部附属幼稚園園長となり、幼稚園における子どもの生活を誰に気がねすることなく、十分観察したり、それに参加する機会が与えられました。また、多くの幼稚園や保育所の実践に接する機会や保育者の方々と、保育実践についての意見を交換する機会も増えてまいりました。」³⁾このように、保育現場に足しげく通い、子どもと

直に接し、保育者から生の声を聴いていた時期である。したがって、この時期には史的研究もあるが、保育形態や保育指導法に関する著述も多い。

1970年代の最後の秋山の著作物は井上久雄編の書籍「講座現代教育学 日本教育思想」で分担執筆を担当した江戸時代の儒学者の貝原益軒(以下益軒と記す)に関する章である。この著作物の記述から、益軒は秋山の幼児教育論に影響を与えたと考える。益軒の学問について述べた個所である「知識は実践を導くためのものであり、逆に知識は実践によって確固たるものになる」⁴⁾として「学問の実践性、実用性を強調する」⁵⁾ので、教育論は具体的な方法論をもって述べられている。また、益軒は幼児期の教育を「特に考慮すべき時期」⁶⁾で幼児期の教育上の配慮についての具体的記述を紹介している。特に、秋山は、益軒の「食事や起居など日常のあたりまえの行為のなかで、人倫のみちを自然に体得させなければならぬとするのである。『平常と学習』『ならふと教える』ということが、幼児に区別されて意識されることは望ましいことではない。」⁷⁾という教育観を挙げて分析をしている。この点、まさに幼児教育方法の本質をついたものである。その以外にも「幼児の自然性を十分認め」⁸⁾ること「随年教法」⁹⁾といった発達段階に即した具体的な教育方法も紹介している。益軒を具体的・体系的な教育論を展開した人物として評価している。この論は、この後の秋山の教育観の礎になったのではないだろうか。

このような1970年代のちょうど真ん中で書かれたのが「子供とおとなの出会いから4 子育ての知恵」である。本稿では、この書物の詳細な分析を試みることによって、秋山の幼児教育観の基礎を明らかにするとともに昭和期後半(1970年代)の幼児教育史の史的資料の検討につながることを期待する。

2. 「子育ての知恵」の概要

1) 発行について

初版第1刷は1974年6月20日に三省堂から発行されている。正式名称は「子供とおとなの出会いから4 子育ての知恵」であり、「子供とおとなの出会いから」シリーズの4巻という位置づけである。

発行に際して、秋山は以下のような思いを裏表紙に載せている。

『「はえば立て、立てば歩めの親心」子どもに対する親の願いは、その時代・社会と共に尽きるところはありません。現今の幼児教育に対する過熱化現象も、社

会のしくみ、親の願いからすると、能力主義教育が生み出した当然の帰結なのかもしれません。しかし、それが、正しかったのかどうか。今一度、思いっきり江戸時代にまでさかのぼって、たとえば、『七五三』『ひな祭り』『子守唄』に込められた親の願い『玩具』を通じての子ども『群』への語りかけを、今の教育・子育てに照らして考えてみたいと思います。」
10

秋山が当時憂っていたのは「幼児教育に対する過熱化現象」であり、その根拠を江戸時代の行事や伝承に求め考察したのが本書であったと述べている。

2) 章立てと内容について

本書は「はじめに」の後、7つの章で構成されている。それぞれの章の内容を以下に述べる。

第1章は「幼児保育の過熱化現象」である。その内容は、「零歳からの教育」「早期教育の可能性を示唆する実例」「早期教育の功罪」「早期教育をささえる社会的背景」「早期教育への期待と親のあせり」「先人の生活に学ぶ保育のあり方」であり、秋山が当時幼児教育の最重要課題と憂っていた早期教育に関して、先人の幼児教育観を取り入れて警鐘を鳴らしている。

第2章は「保育をささえる社会的背景」である。内容は、「保育観を規定するもの」「家業の繁栄・維持のための家庭教育」「家格を維持するための家庭教育」「家庭教育へ立身出世主義の導入」「教育における社会的連帯」「家庭教育へ立身出世主義の導入」である。保育は元来、家庭で行われていた営みであるので社会が家庭に要求する事項によって、保育観は規定されている。従って、幼児教育過熱化現象の原因もこの文脈の中で説明できるとしている。

第3章は「先人の幼児教育観」である。内容は、「儒者たちの幼児教育観」「幼児期の教育の必要性」「親の教育的役割」「幼児期の教育上の配慮」「年齢段階別の発達の特色の考え方とそれへの配慮」「ことわざに見る幼児教育観」である。江戸時代の儒者の記述を紹介して、江戸時代の経験主義的思考からも早期教育を行うことに異論を述べている。

第4章は「子どもの成長に伴う親の養育上の配慮」である。内容は、「幼児に対する考え方」「生育儀礼に託する親の願い」「通過行事の意味」「取り上げ婆と子どもの成長」「子どもを育てるための呪術的儀礼」「モモカ」「七・五・三とその源流」である。前章の「儒者たちの

幼児教育観」では主に武士の家庭教育の考え方を取り上げた。そこで、本章では、江戸時代の生育儀礼の意味と方法を考察することで武士以外の人々の幼児教育観を明らかにしている。

第5章は「年中行事と子どもの生活」である。内容は、「年中行事を問題にするわけ」「年中行事とは何か」であり、年中行事として、三月節供・ひな祭り・端午の節供・初節供・七夕を取り上げ、その由来や方法を説明しながら、その中に込められた親の思いを明らかにしている。そして、その後に「年中行事への子どもの参加とその意義」「年中行事の教育的側面」がある。これらによって、年中行事の教育的効果を説明している。

第6章は、「子どもの発達と遊び」である。内容は、最初に「遊び仲間と子どもの生活」で「遊び仲間の教育性」「信仰行事から子どもの遊び」「遊び・唱えごと・動き」「子守りと子守唄」「おもちゃと子どもの遊び」について述べている。そして「子どもの生活と言葉の習得」では、「言葉の生活を考える立場」「言葉を覚えるすじみち」「遊び仲間と言葉の生活」「言葉の学習をささえる他の条件」について述べている。この章では、柳田国男の研究を引用して、子どもの遊びは発達に大きな意味をもつことを説明している。

第7章は「幼稚園の発足と幼児教育観の変質」である。内容は、「幼稚園観の模索」「遊びをささえる条件の変化」「倉橋惣三の生活教育」「幼児教育の新しい方向を求めて」である。これまでの章は江戸時代を中心に述べていたが、この章では明治時代に入って社会の考え方が変化したことを幼稚園の立場から説明し、そこから新しい幼児教育の方向について論じている。

3. 秋山の教育観を支える先人について

秋山は本書の中で先行研究を用いて、自身の教育観を説明している。したがって、これらの人物を分析することで、秋山の幼児教育観の礎を明確化できると考えた。その結果を以下に記す。

1) 出現人物の総数

216ページある本書に取り上げられた人物は43名である。出現した頁1枚を1回として、取り上げた頁数をカウントした。その結果、圧倒的に多いのが、柳田国男(47回)である。柳田に続いて、以下のような結果となった。

貝原益軒(17回) 大原幽学(13回) 山鹿素行(10

回) 山川菊栄 (6回) 倉橋惣三 (5回) 有坂興太郎 (4回) 斎藤良輔 (4回) 中村正直 (4回) フレーベル, F (4回) 林 子平 (4回) 松田道雄 (4回) 石川 謙 (3回) 今泉みね (3回) 大藤ゆき (3回) 香月牛山 (啓益) (3回) 中江藤樹 (3回) 細井平州 (3回) 宮本常一 (3回) 江村北海 (2回) 折口信夫 (2回) クリーク, E (2回) 上 笙一郎 (2回) ショシヤール・P (2回) 佐藤一斉 (2回) 杉本欽子 (2回) 時夷利彦 (2回) 西川求林齋 (2回) である。そして、1回のみ出現は以下の人物である。

石井 勲、尾形裕康、佐藤 潔、世 阿弥、関 信三、千葉正士、永田一郎、ピーポディー, E・P、ペスタロッツ、ベネディクト, R、早川正紀、福沢諭吉、松永伍一、森口多里、ルソー, JJ

以上から、江戸時代から明治時代の日本の儒者・教育学者が多いといえる。

2) 章ごとの出現人物

次に、出現した人物を章ごとに分析した。その結果は以下の通りである。

第1章「幼児保育の過熱化現象」では、永田一郎、時夷利彦、永田一郎、石井 勲、ショシヤール・P、クリーク, Eの6名である。

第2章「保育を支える社会的背景」では、ベネディクト, R、今泉みね、杉本欽子、中村正直、福沢諭吉、柳田国男の6名である。

第3章「先人の幼児教育観」では、貝原益軒、江村北海、香月牛山(啓益)、佐藤一斉、細井平州、山鹿素行、世 阿弥、西川求林齋、石川 謙、大原幽学、中江藤樹、尾形裕康、林 子平の13名である。

第4章「子どもの成長に伴う親の養育上の配慮」では、香月牛山(啓益)、山川菊栄、松田道雄、石川 謙、折口信夫、千葉正士、早川正紀、大藤ゆき、柳田国男の9名である。

第5章「年中行事と子どもの生活」では、有坂興太郎、宮本常一、今泉みね、山川菊栄、折口信夫、柳田国男の6名である。

第6章「子どもの発達と遊び」では、有坂興太郎、森口多里、ルソー, JJ、宮本常一、佐藤 潔、斎藤良輔、斎藤良輔、山川菊栄、松永伍一、上 笙一郎、杉本欽子、柳田国男の12名である。

第7章「幼稚園の発足と幼児教育観の変質」では、ピーポディー, E・P、フレーベル, F、ペスタロッツ、関

信三、倉橋惣三、中村正直、柳田国男の7名である。

3) 考察

出現数が最も多い柳田国男は、多数の章で取り上げられている。その章は、2章、4章、5章、6章、7章である。この理由は、本書の内容が江戸時代の教育観を主にしたものであり、農民層や一般庶民の幼児教育観を調べるには「ことわざ」や「年中行事」から推察する必要があるからと考えられる。秋山はこのことを次のように述べている。

「これまでのところでは、主として江戸時代における儒者たちが、換言すれば、当時の知識階級の人々が、幼児をどのようなものと考え、その教育をどのようなものとして把握していたかを見てきた。これから、しばらくの間、江戸時代の人口の大部分を占めていた農民層や、一般庶民の間に浸透していた、幼児についての考え方や、幼児期の子どもに対する養育上の配慮を考察してみたいと思う。

幼児保育の問題は、明治以降においても、とかく意図的な領域の中に位置づけられていなかった。それは、明治国家の志向する近代的知識の伝達は幼児期においては配慮されず、また幼児の保育の問題は、学問的考察の対象として考えられず、民衆の間に長い間継承・伝達されてきた幾代にもわたる育児経験と民衆の知恵によって生承出されてきた、育児や教育の方法によってささえられるところが大きかったのである。現在においては、長い間継承されてきた育児や幼児教育のしかたや、育児慣行は、ほとんど形骸化され、単なる通過儀礼としてしか残存していないとはいえ、それらはわれわれの生活の中になお根強く残っているのである。初参り・七五三・ひな祭りなどを思い浮かべれば、そのことはうなずけるであろう。」¹¹

これが、柳田国男の出現数が多い理由であるが、その一方で秋山の興味関心が柳田国男の研究そのものにあっただとも考えられる。柳田は民俗学者である。江戸・明治時代の風俗習慣に教育的価値を見出した見解に秋山は惹かれたのではないだろうか。

柳田に続いて多いのが、貝原益軒、大原幽学、山鹿素行である。これらは江戸時代の儒教学者である。儒教学者であり教育論者でもある。儒教学者が教育を語る理由について、益軒が書いた「和俗童子訓」の説明を用いて以下のように説明している。

「江戸時代における身分社会の中で、とくに武士階級

の子弟の教育のみを対象として書かれたものではなく、身分を越えた『子ども』の教育法を論じたもの¹²である。そして、なぜ、益軒がこのような考えを持つに至った理由について「益軒の仕事は藩主やその家臣、さらにはその子弟教育にその大半がささげられたため、やはり士族の教育が念頭におかれていたのであろう。文字の教育を早くから要望し、しかも、かなり具体的に構想しているのは儒者としての益軒の経歴によるところが大きいものと考えられる。」¹³と述べている。これは、益軒だけの理由ではなく、当時の儒教者に共通する経歴であろう。したがって、これこそ秋山が江戸時代の儒教者の教育論にこだわった理由と言うことが出来よう。

4. 家庭教育への提言

1) 家庭教育への問題提起

前述したように「家庭教育の過熱化現象」「早期教育」に関する提言が本書の中心課題である。

まず、巻頭部分の「はじめに」で「児やらひ」という言葉の意味を次のように説明することで、当時の大人の教育観に修正を求めるといふ自身の考えを明確に示している。

「この『児やらひ』というのは、柳田国男氏の説明によれば、子どもを後ろから追い立て、また、突き出すことであって、今日の教育のように、おとなが前に立って子どもを引っ張っていかうとするのとは正反対の方法であった。」¹⁴

この見解を説明するための方法として、江戸時代の幼児観や教育観を用いている。その記述は本書の随所に記されているので、例として2点をいかに示す。

1つ目の例は、江村北海の「授業編」で幼児の文字指導についての方法を紹介する箇所である。以下のような記述をもって、幼児への厳格な指導を窺っている。

「最近の幼児期からの早教育論は、幼児に学習を意識させる考え方の一つの類型と考えることができる。幼児期から文字を教えることの可否と、幼児期の知育の方法について、江村北海はその著『授業編』(巻之一、幼学の項・天明三年)の中で文字を幼児期から教えることについて次のように述べている。

『ソノ父兄、小児ヲ愛スルノアマリニ、何ノ書ヲイカホド覚ヘタルナド、人ヘモフイテフ(吹聴)スル意ヨリ出デ、ソノ実益少ナシ』

また、北海は幼児を教育するに当たって、自分の膝もとへ子どもを引きつけておいて厳格に教え、字を覚

えなければ、しかったり、たたいたりすることに反対している。その理由はおおよそ次のようなことである。すなわち、幼児というものは、学問しなければならぬという自覚がまだ十分育ってきていない。幼児が書を読むことは苦しいことだと感じていても、父母にしかられるのが恐ろしいからしかたなく読むということになって、心の中ではだんだん書物を読むことが苦痛になり、きらいになっていく。このようなことがたび重なりと将来学問を忌避するようになってくる、というのが北海の見解である。」¹⁵

2つ目は、柳田国男の「国語の将来」から以下の記述から幼児が言葉を習得する方法を述べ、幼児への教育方法への提言としている。

「『親と家庭の長者とは、おのおの意識したる国語教育の管理者であった』。このことは現在においても言いつくされていることであるが、昔の親や家庭の長者は実際の具体例によって、もしくは『生命を添えて』いちいちの語を子どもに授けたのである。そのことによって、子どもたちは『遠い仮設の例をもって想像力を重課するとは事わかり、これは現前の要所要所に、最も適切なる用法を体得』することになるのである。親は、具体的な場にそうぐうして、音や抑揚をつけ、身振り顔付き目の動きも伴って子どもに話しかけ『耳で覚えて行く幼児の語いを、以前はあまり制限せぬのが方針であったらしい』」¹⁶

以上の例で示したように、本書は、儒者の教育論や民間で伝承されてきた「ことわざ」「通過行事」を基に、江戸時代の幼児観・教育観を説明するものであるが、このことによって当時の家庭教育の過熱化現象や早期教育に警鐘を鳴らすことを意図して書かれたものであると考える。

2) 家庭での早期教育過熱化の原因

秋山は、幼児教育に対する過熱化現象の中でも、家庭における早期教育が過熱化していることを危惧しておりその原因は社会状況としている。家庭での営みを考える時に「家庭がその社会の中でどのような役割や機能を果たしており、また、その社会の中における人間形成や教育の理念がどのような方向にあるかということを見無視して考えることができない」¹⁷のであるから、家庭教育の過熱化現象は社会状況を考察する必要があるというのである。そこで、秋山は江戸時代の社会の状況が家庭教育に及ぼした影響について説明を試み、その理論を現状の

説明に使用している。それを以下に示す。

「かつての社会においては、『家々で勝手に子どもを躰けることなく、村人の生き方というものに従って教育』されており、しかも、「家の秩序維持」のために家庭でのしつけがなされていたことはすでに見た。ここでは、子どもの利益を尊重するというよりは、家そのものの利害が何よりも優先したと考えることができる。ところが、ある個人の立身出世がその一族の承ならず、その『ムラ』全体の名誉であるという考え方が確立されるにつけて、家庭の中に子どもを本位とし、子どもの利益に重きをおいた家庭教育の方法が導入されてくるのは当然のことといえよう。しかも、子どもの利益がその家族の利益にもなり、さらにその郷土の利益にもなるという点に家庭教育のあり方の転向を見ることができる。この点において、国家の人間形成理念、村人の生き方と家庭教育の理念は、共通性を持っていたわけである。このような社会的背景のもとで、立身出世主義の教育が望ましい家庭教育理念として位置づけられていったのである。」¹⁸

明治時代になり、「在来、階層上昇への道が閉ざされていた下級武士や武士以外の階層の有能な子弟たちは将来の立身出世を夢見て学問に精励し、上京遊学が、盛んに行なわれるようになっていった。」¹⁹そして「明治十年代後半から家族主義道徳が、さらに国家主義道徳が個人道徳にかかわって強調される中においても、この立身出世主義は矛盾なく共存していった。」²⁰この状況が家庭での早期教育過熱化現象を生み、それが現代まで続いていると説明している。

3) 家庭教育のあり方

秋山は、子どもの年齢別発達の観点から家庭教育の在り方を捉えようとして、江戸時代の幼児観・教育観を紹介している。つまり、子どもの教育は年齢別で考えるべきであり、特に幼児期はおとなと異なるので配慮が必要であるということである。そして、それは江戸時代の儒者だけでなく民衆も周知していて、それは「ことわざ」の分析から理解できるとしている。

まず、江戸時代の儒者たちの幼児教育観を示し、幼児への教育的配慮を明らかにしている。そして、その次に儒者たちの書物の中から、幼児の年齢別教育方法の箇所を引用し、「年齢別の特徴」に沿った教育的配慮の必要性を訴えている。そして、これらによって、おとなからの一方的な教え込みによる早期教育は幼児の年齢別特徴

に合わないこと、さらに、それは科学的根拠だけではなく先人の経験知からも説明できることを強調している。江戸時代の先人の著書から、教育における年齢別特徴について説明しているのを、それを次に挙げることにする。ただし、江戸時代における年齢についての記述を考察する時「数え年」に配慮する必要がある。このことについて秋山は次のように述べている。

「この場合、一つ注意しておかなければならないことがある。それは年齢についての数え方の問題である。現在の年齢の数え方は、生まれた時は零歳であり、誕生日が過ぎて初めて一歳となる。しかし、かつての社会においては、生まれるとただちに一歳であり、それから正月が来ればすべての人は一様に年齢を一つ加えることになっていた。一歳の者は全員二歳となるのである。したがって、十一歳というのは、生後二日目の者もあれば、三百六十四日を経過した者もあるということでかなりの幅がある。先人たちの見解を引用してこれまで述べてきたもの、またこれから述べようとする年齢はこのような意味における年齢であることに注意してほしい。いわゆる数え年と満年齢との違いである。だから、ここで言う四歳というのは現在の三歳に当たると考えればほぼ間違いはない。」²¹

ここに、秋山の気配りの細やかさの一端を見る思いがある。では、本書の年齢は「数え年」であることを考慮しながら儒者による年齢別配慮を考察した結果を以下に述べる。

○2歳未満

「多くの学者は『小児』『幼き時』などの表現で幼児期を総括してとらえ、年齢別の特色を事こまかに分けて考えないのが普通」²²であり、幼児の教育に携わったと思われる儒者のほとんどは3歳からの年齢別配慮を述べている。しかし、この中で、大原幽学のみが2歳未満の幼児の発達について次のように述べている。

「人は生まれて母乳を飲み始める時が、自分の感覚で、外界の事物を感得し始める時である。しかし、生後百日間は、子どもの心の働きは、はっきりとした方向性を持っているわけではない。しかし二歳に近くなるにつれて、笑顔も、声を出して笑うこともできるようになる。このころから人間本来の感情が働き出すのである。発声もしっかりしたものになり始め、子どもの気力も漸次横溢してくる（『微味幽玄考』）」²³

○2歳

貝原益軒、牛山翁香月啓益の著述を引用し、「牛山も、

子どもの発達を無視して教えることに反対して、彼も山鹿素行と同じように『兩の生ゆるは、食をくはんためなることを知るべ』として、子どもの成長に伴って、無理なく親が養育上の配慮をなすべきこと²⁴を2歳児の配慮としている。

○3歳

山鹿素行と大原幽学の引用から、以下のように、3歳を説明している。

山鹿素行は「三歳という時期を一つの発達上の節としてとらえている。三歳になると、視聴言動もなんとか形をととのえ始めてくるのだと考えた。このごろから、人間として必要な生活態度をしつけていかなければならないとするのである。言葉づかい、遊びたわむれる中にも自ら人間として必要な節度をわきまえ、他人に対する態度などを身につけさせることが必要であると考えているのである。」²⁵と述べている。また、大原幽学は「『子生まれて三年、しかる後に父母の懐を免る』(『慈元抄巴卷下』)」²⁶や「『見聞くことに思惑あり』(『豆微味幽玄考』)」²⁷と述べていることを紹介することによって、3歳は、「親に依存していた状態からへ自分でひとり立ちできる事がらが多くなってくる」²⁸し、「無批判に外界の事物を受け入れるということから、多少自覚的に受け入れるようになる」²⁹年齢だとしている。

○4歳

「四歳の子どもの養育をとくに述べている記述は少ない」³⁰のであるが、大原幽学が子どもの成長を松の木の成長に例えて説明している箇所を引用し、「現代的な表現をするならば、どのような子どもに育てていこうとするのかという教育の目標と、それをすすめるためのしつけの方法とを親がはっきりと、自覚することが必要」³¹なことが、4歳への配慮であるとしている。

○5歳

大原幽学の5歳に対する幼児観は「『云ひなす事のよろしからればとて、いたくこれを制する時はその制せらるる因みに、思ふ事も唯々捻塊れるばかりにて、才知屈して鐸る所以無し』(『微味幽玄考』)」³²である。このことは石川謙も認めているので、「親の一方的な判断でこれを禁止とか叱責の形で押さえつけることよくない」³³としている。

○6歳

「六歳の子どものための発達観や教育の方法観については、かなり多くの叙述が見られる。」³⁴のである。山鹿素行も大原幽学も知的な側面だけでなく情緒面の発

達も著しく、特にこの年齢から男女差が出てくることに留意しているとしている。また、益軒は以下のように、6歳からの教育内容を具体的に示していると述べている。

「六歳の正月に初めて、一・二・三・四・五・六・七・八・九・十・百・千・万・億の数の名と、東西南北の方向の名を教え、生まれつきりこうであれば、六、七歳から和字(かな)の読み書きを勉強させるのがよい。初めて和字を教えるには、あいうえお五十音を平がなで書いてや縦、横に読み書きできるようにする。また、往来物といわれる当時の教科書のかな文の手本も習わずとよい。六歳ごろから目上の者をうやまうことを教え、尊長卑幼の相異を知らせて、適切な言葉づかいも教えておかなければならない。」³⁵

益軒は6歳が学問を始めるのにふさわしい年齢であるとしているのだが、秋山はこれに対して「益軒が文字の学習を六歳、現在の四歳から五歳に相当する年齢で提唱したことについては、現在これを無条件で承認することには問題がある」³⁶と異論を述べているが、その方法は「すぐれた見識をうかがうことができる」³⁷としている。

○7歳

「七歳という年齢は過去の社会においては、精神発達上一つの時期を画するもの」³⁸であったという考えを、石川謙や尾形裕康の学説の引用で説明している。そして、益軒の「『七歳、男女席を同じくしてならび坐せず。食を共にせず』(『和俗童子訓』)」³⁹、山鹿素行の「『七歳は女子の血氣己に動くの初めなれば、男女の別を立て、同じ席に居らず、同じく食せしめざる也。』(『山鹿語類』)」⁴⁰、その他、大原幽学は男児と女子の性質面の差が7歳から出てくると述べていることを紹介し「七歳児の発達やしつけの面で、とくに顕著に見られる配慮は、男子と女子とを分けて考えようとしていることである」⁴¹と述べている。しかし、この男女の別については、林子平が「子どもを教えるに当たっては、三、四歳から男女の別のあることをよく言い含めておかなければならない」⁴²と述べ、7歳独自の考えではなかったともしている。

○8歳

大原幽学や山鹿素行が「八歳になれば落ち着いてじっくり物を考えるようになる」⁴³ので、7歳までの教育方法ではなくなるとしている。

8歳の教育方法は以下のものである。

「素行は『八歳は小学に入るの歳』と考え、子どもの指導も七歳までとは異なる点をいくつか指摘している。これまでは『起居常なく飲食時なし』というように、

しつけもかなり子どもの生活に即した自由が許容されていた。しかし、八歳からは『戒をつよく』して、読書算などを学ばせ、家の職業としている仕事をぼつぼつ覚えさせるように、日常生活上の行動も礼儀にかなうように努力させるべきだという。子どもの生活を優先して考えていたことから、人間としての道、すなわち、礼法などを教えるという方向が強くなって来るのである。」⁴⁴

数え年の8歳は現在の7歳である。大原幽学や山鹿素行の述べる教育内容と方法の8歳からの変容は「多くの先哲の貴重な経験によっても七、八歳が教育上の一つの転機として考えられてきたことは、やはり意味のあることなのであろう。」⁴⁵と述べ小学校の始期に関わる問題にも考慮している。

5. 家庭教育への見解

「子育ての知恵」から、昭和40年後半の秋山の幼児教育に関する考えは次の2点であると考えられる。

1点目は、幼児教育で問題とされているのは、家庭での早期教育過熱化現象であること、2点目は、家庭教育の問題の解明には、幼児の生活や親の教育的配慮に焦点を当てて考察する必要があることである。

昭和40年代は「第2次ベビーブームの1943年をピークに、その後は出生率、出生数とも毎年低下が続」⁴⁶き、また『高度経済成長政策』がもたらしたさまざまな矛盾やゆがみが複雑にからみあって家庭生活に重くのしかかり、子どもの生活がゆがめられ、成長・発達の内側から蝕まれやすくなった」⁴⁷時代である。これら家庭や子どもをとり巻く状況の中で、秋山が問題視したのは、家庭での早期教育の過熱化現象である。さまざまな問題が生じた中で、早期教育の問題に向かったのは岡山大学附属幼稚園に足繁く通っていたことに由来すると考える。

家庭教育の問題を幼児の生活や親の教育的配慮に焦点を当てて考えていることに関して、秋山はことわざや通例行事といった家庭や地域社会で普通に行われてきた事項をもとに考察を進めている。この理由について本書には明確に記されていない。しかし、1979年に発行された「幼児教育論」に以下のように簡潔に述べている。

「学習の可能性はそのまま教育の妥当性に通ずるものではない。学習の可能性は、科学によって、かなりの程度解明することができるが、教育の妥当性の問題は科学によっては解明できない。どのような幼児を育てることが望ましいかと考えるのか、現代社会において

幼児の発達を保証するためには、どのような働きかけをすればよいのか、といった『幼児観』『教育観』とのかかわりにおいて、はじめて明らかにされてくるのである。」⁴⁸

教育の妥当性の問題は、科学によっては解明されないと断言している。経験的・直観的にこの問題を把握しようとした先人はいくつかの経験的な結論を持っていたので、そのことを考察の対象にすることで教育の妥当性を解明できるとしている。これが秋山が江戸時代の教育論にこだわった理由と考える。

6. おわりに

「子育ての知恵」の詳細な分析を試みることによって、秋山の幼児教育観の礎を明らかにするとともに、昭和期後半の幼児教育史の史的資料の検討につながると考え考察を行った。

「子育ての知恵」の2年前に刊行された「岡山の教育」の巻頭に「民俗学者によって開拓されてきた領域であるが、教育学の立場からも解明と意味づけが今後なされなければならぬ分野であると考えたからである」⁴⁹とある。秋山は教育を論じる時、民衆の中に脈々と続いている習俗とか年中行事、慣習に目を向ける必要性を感じてそれらを主体とした研究を行っている。そして、その集大成として「子育ての知恵」を著したのであるが、本書には幼児の教育以外についても問題提起を行っている。それは「教育の男女の差」「遊びの歴史的意義」などである。特に、江戸から戦前における女子教育についての意見が散見される。本書が刊行された昭和49（1974）年における秋山の問題意識を伺うことが出来る。

今後は、本稿で考察できなかったこれらの事項について本書を分析し、秋山和夫の幼児教育論だけでなく女子教育についても研究を進めたい。

引用文献

1. 小野順子「秋山和夫における幼児教育論（1）－生活科の幼小関連における重要性について－」中国学園紀要第18号（2019）
2. 小野順子「秋山和夫の幼児教育論（2）」福山平成大学福祉健康学部紀要福祉健康科学研究第16巻（2021）
3. 秋山和夫「子どもの目が輝くとき」チャイルド社（1980）p207
4. 井上久雄編（1979）. 講座現代教育学2日本の教育

- 思想、福村出版、p178
5. 同上. p178
 6. 同上. p179
 7. 同上. p179
 8. 同上. P180
 9. 同上. p185
 10. 秋山和夫「子どもとおとなの出会いから 4 子
育ての知恵」三省堂（1974）裏表紙
 11. 同上. p92
 12. 同上. p75
 13. 同上. p75
 14. 同上. 巻頭部分
 15. 同上. p60
 16. 同上. p187-p188
 17. 同上. p22
 18. 同上. p43
 19. 同上. p40
 20. 同上. p41
 21. 同上. p65
 22. 同上. p62
 23. 同上. p67
 24. 同上. p68
 25. 同上. p68
 26. 同上. p69
 27. 同上. p69
 28. 同上. p69
 29. 同上. p69
 30. 同上. p70
 31. 同上. p70
 32. 同上. p71
 33. 同上. p71
 34. 同上. p72
 35. 同上. p74
 36. 同上. p75
 37. 同上. p75
 38. 同上. p76
 39. 同上. p78
 40. 同上. p78
 41. 同上. p78
 42. 同上. p78
 43. 同上. p82
 44. 同上. p82-p83
 45. 同上. p85
 46. 汐見稔幸・松本園子・高田文子・矢治夕起・森川
敬子「日本の保育の歴史 子ども観と保育の歴史150
年」萌文書林（2017）p315
 47. 同上. p316
 48. 秋山和夫・小田豊・牧文彦「現代の教育学3 幼児
教育論」ミネルヴァ書房（1979）
 49. 秋山和夫「岡山の教育」日本文教出版（1972）ま
えがき

A Study on Akiyama Kazuo's Thought of Early Childhood Education 3 Focusing on "The Wisdom of Child Rearing"

Junko Ono

Department of Childhood Education,
Faculty of Welfare and Health Science,
Fukuyama Heisei University

Abstract

This paper is the third report of the Akiyama study. In the first report, "Elementary and Child Cooperation", we had a bird's-eye view of Akiyama's overall achievements. And, it became clear as a problem to verify the history of early childhood education in the latter half of the Showa period when Akiyama lived based on historical materials. For this reason, in this paper, we took up one work "4 Wisdom of Child Rearing from The Encounter between Children and Adults" from a huge number, and decided to verify it in detail.

As a result, it was found that Akiyama's idea of early childhood education in the second half of 1965 was the following two points.

The first is that early childhood education is a problem that is considered to be an overheating phenomenon of early education at home, and the second point is that it is necessary to focus on the lives of young children and the educational considerations of parents in order to elucidate the problem of home education.

Akiyama is particular about the theory of education in the Edo period when developing early childhood education theory, but the reason became clear in this study. In other words, I believe that the problem of educational validity can't be solved by science. Therefore, since the foreconvert who tried to grasp this problem from experience and intuition had some experienced conclusions, it is said that the validity of education can be elucidated by making that an object of consideration.

KEY WORDS : Kazuo Akiyama, Home Education, Early Childhood Education